

Book Review 36-19 天災 #火山に馳す

『#火山に馳す 浅間大変秘抄』（赤神諒著）を読んでみた。

著者は小説家、法学者、弁護士。上智大学大学院法学研究科教授。日経小説大賞、大藪春彦賞を受賞。

日本は震災大国である。近年では、2011年3月11日の東日本大震災、2024年1月1日の能登半島地震。本書は江戸時代中期の浅間山大噴火を扱っている。

本書には4つの柱がある。一つ目は火山被害の甚大さを伝えること。二つ目は血のつながらない人間が家族になれるのかを問いかけること（人にとっての故郷と生きる意味）。三つ目は政を司る役人が民にどこまで尽くせるのかを問い直すこと。四つ目は老中や大大名がどれほど被災民に経済的補助ができるのかを見極めること。

江戸時代中期（田沼意次時代）の浅間山大噴火で村々が土石流に襲われた。鎌原村（現在の群馬県嬲恋村鎌原地区）の被害は甚大で、村人の8割が死に、生存者は93人だけであった。現地に幕府勘定吟味役の根岸九郎左衛門が派遣された。そこでの選択は、出世頭の若き代官Hが進言するとおり、廃村と移住か、それとも村を再建するかの二つである。常識的に考えれば廃村である。ところが根岸が選択したのは村の再建であった。加えて残された村人を組み合わせて家族（8組）を作り直し、故郷を再建しようとするものであった。そこに多大な苦難が待ち受ける（災害の再発生や幕府側の不穏な動き）。果たして、村は再建されたのであろうか。

読後に著者の本書についてのインタビューを読んでみた。

著者が考える復興の政策決定や指揮をとる立場の人間が大事にすべきことは三つ。

まず「無私」、自分のためじゃないという前提（現代に最も欠けているもの）。何とかしてあげたいという気持ち、そこが政治の出発点だと思う、と。

二つ目は「信念」。勉強して、ちゃんと皆の意見を聞いて、考え抜いた上で、信念を持って進めるということが大事。

三つ目が、「本当の意味で寄り添う」ということ。

読んでいるとどこまでが史実でどこからがフィクションかを知りたくなる。

根岸九郎左衛門は本書の中で奇談や怪談の蘊蓄を語るが、実際に奇談や雑話を

聞き書きした『耳袋』の著者としても知られている人物だそう。そして下級旗本から出世し勘定奉行・南町奉行を歴任した人物で、田沼意次の後を襲った松平定信にも罷免されることもなく、大出世を遂げている。また、生き残った村人を組み合わせて家族を作り直すという策も史実のようだ。

赤神諒氏の作品に外れはない。これまでは武士の生き様を描いて感動を与えてきたが、今回は被災民の生き方、家族のあり方、役人の仕事ぶりに、ここまでやるかと感嘆するばかりであった。

耳囊（耳袋：みみぶくろ）とは

江戸時代中期から後期にかけて根岸九郎左衛門が、佐渡奉行時代（1784-87）に筆を起し、死の前年の文化11年（1814）まで、約30年にわたって書きためた全10巻の雑話集。公務の暇に書きとめた来訪者や古老の興味深い話を編集したもので、さまざまな怪談奇譚や武士や庶民の逸事などが多数収録されている。